

なかま

発行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025
佐倉市鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ ジージ好きなひと..... 佐々木 栄 公德心..... 吉野一志
3 ページ 川柳で楽しく..... 及川 竜太郎 武家諸法度を読んだ..... 木村幹男

『なかま』四〇〇号を記念して

佐倉市教育長 葛西 広子

平成二十二年二月号で『なかま』四〇〇号を発行されたことは、ひとつの大きな節目を迎えられたこととお喜び申し上げます。

これまで『なかま』を支えてこられました編集委員をはじめ、原稿の力をしてくださる佐倉市民カレッジ情報コーナー卒業生、投稿者、読者の皆さま一人ひとりに長く愛され、そして支えられてきたことが四〇〇号まで続いた証ではないかと感じております。

平成二十一年は、徳川幕府の朱印船貿易開始から四〇〇年を迎えました。そして、平成二十二年は、土井利勝が佐倉に入府されてから四〇〇年を迎えます。

その中で、『なかま』が発刊以来四〇〇号を数えるというの何か運命的なものを感じます。

『なかま』は、昭和五十一年十一月に佐倉市民カレッジの前身であります「長寿大学」の学生有志が発行しました。「長寿大学ニユース」に始まり、昭和五十二年五月に佐倉市立中央公民館の事業として受け継がれ、『なかま』に衣替えをして現在に至っているとのことです。

中央公民館の事業として引き継がれても、『なかま』編集委員はボランティアとして毎月二回開催されます編集会議により、創刊当時の意義であります「情報交換」、「新しい知識の習得」、「日常の感慨の語り合い」、「趣味の披露」、「希望と意見を述べ合う」が引き継がれております。

今では、高齢者だけでなく高校生までと幅広い世代の読者層を持ち、過去には中学生からの投稿もあったと聞いて

おります。加えて、朗読ボランティア「こおろぎの会」の協力をいただき、視覚に障がいのある方へもとどけられていると聞いております。

まさに、『なかま』は世代間を越え、多くの方に読まれる情報紙にかわってきていると感じます。一つの投稿作品から多くの方が学び、共感し、そして社会を築き上げ地域課題を解決する礎となっていることは、まさに『なかま』が社会教育の縮図として見られるのではないかと感じております。

今号の四〇〇号はあくまでも通過点で、すでに来月の四〇一号の発行に向けて取り組まれているとのことです。これからは市民に愛されている『なかま』を引き続き発行していただくとともに、また『なかま』を支えてこられた皆さまのご健康とこれからのますますのご活躍を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

ジージ好きなのひと

若い頃から、人生劇場や唐獅子牡丹のような任侠の世界に仄かな憧れを抱いていたので、たとえ孫が出来ても、デレデレとした甘い態度をとることはあるまい、と高を括っていた。

ところが、である。一昨年の正月、娘夫婦に女の子が誕生してから、君子ならぬエセ任侠は豹変する次第となった。携帯の待ち受け画面は勿論のこと、ふと気が付けば、食卓における妻との乏しい会話の中心も孫娘となっていてはいないか。

娘は毎月のように孫を連れて東京から遊びにやって来る。この時の私の楽しみの一つは、片言ながらも、よく喋るようになった孫をからかうことである。一緒に遊んでいたある日、孫に向かって、ママが好きなひと、と尋ねると、直ぐに、可愛らしい手を挙げて、

ハリーと答えた。次にパパ、

さらにバーバが好きなのひと、と同じように聞くと、元氣よくハリーと続けて手を挙げる。この機を逃さず、ジージ好きなのひと、と畳み掛けると、やや条件反射的ながらも、ハリーと手を挙げた。これで味を占めたので、暫く間を置いてから、ママ、パパ、バーバの三段階抜きで、いきなり、ジージ好きなのひと、と不意打ちを食らわせる。すると、嬉しいことに、ハリーの声と共に手もするすると挙がった。すっかり気分を好くして、これをしつこく繰り返していたら、そのうちにプイと顔を背けてしまった。プチ乙女のデリケートな心を傷つけてしまったようだ。

近頃は、ジージ好きなのひとの相変わらずのワンパターンの攻めに対して、日々成長する孫娘のガードは固く、ハリーと手の挙がることは滅多にない。

(井野 佐々木栄)

公德心

日本人の公德心に疑問符が付いてから久しい。

先日図書館で体験したことの一つ披露し、改めて現在の日本人の公德心を考えてみたい。図書館を舞台にしたのは、図書館を訪れる人は少なくとも自己研鑽や、知識への探究心に富んだ人々だろうからである。そのような人達ですら、眉をひそめるような事が多々ある。心ない利用者のモラルの欠如だ。

本の無断持ち出し、本への書き込み、汚損や館内での飲食などが、残念ながら後を絶たないようだ。それ以外にも長期に亘る未返済や、督促にも応じない利用者もいるみたいだ。

過日図書館で見た書き込みには、驚きの極致の一例である。それは図書館で調べものをしていて、関連事項を調べる為『魏志』倭人伝を借り

た時発見した。それは随所に

傍線があるのみならず、本の余白に三桁の数字の足し算が書かれていたのだった。傍線でも許されることではないが、そうしたい気持ちはある程度理解出来る。しかし、足し算には、ただ呆れ果てるばかりだった。『魏志』倭人伝のような本を読む人ですら、このような事が起こっているのだ。一体図書館の本という公共物を、何と心得ているのだろうか。悲しむべきことだ。

電車の中やレストランなどで、話に夢中になり声高に会話をしている人達を目撃することが多々ある。

公共の場での行動には、十分心配りが欲しいものである。
(上志津 吉野一志)



川柳で楽しく

「よく稼ぐ夫婦にもある
ひと休み」

この一句は私が尊敬する神戸ふあうすと川柳社、創始者である相元紋太先生(明治23年、昭和45年)が生前遺された代表句の中の一語である。

氏の語録には「川柳が人間である」や、「人間が川柳を作り、川柳が人間を作るのだ」等等、数多くの名言も遺されている。

この度十月十九日より三十一日まで、聖隷佐倉市民病院のロビーの一画へ、ユーカリが丘在住の笑声さんが所属する幕張川柳会と、私、竜太郎が所属するからたち川柳会(四街道市に本拠地)の協同作品集を展示させて頂く機会に恵まれたが、病院の関係者の皆様からはとても好評であったと知らされた。また、この『なかま』の読者の皆様の中にも何人が目に触れて頂け

たものなら幸いと思う。

私も柳歴は十余年とこの世界ではまだまだ未熟な者だが還暦を過ぎてから出会ったこの川柳へどっぷり浸っているような毎日、晩年と言うべきか現在にして何とも心満たされる日々を送って居ります。

私の最近作の中から一句、
「まだ呑める猪口へ」

心底ありがとう」

これは或る大会での課題「感謝」での入選句です。豎物が取柄のようでもあった自分、川柳に触れることによつてようやくこんな句が作られるようになったと感じる。

最近の何となく暗く荒んだ世相の中、それぞれ川柳と触れ合う事が出来たならきつとカンフル剤となり、心にもゆとりが生まれるものと信じる。
この佐倉市の皆さんにも是非川柳に触れ、楽しんで頂きます事をお奨めします。

(染井野 及川竜太郎)

「武家諸法度」

を読んだ

武家諸法度

一文武忠孝を励し可正禮義事

一参勤交代の儀

毎歳可守所定の時節

従者の員数不可及繁他事

天保九年(一八三八)の武

家諸法度は右のように始まり城の改築、婚姻の届、殉死の禁止、衣装に関すること等、大名として守るべき十九の事項が続く。

いつ習ったのが忘れたが、徳川政権ができたときに、武家諸法度が制定された。今回のこれは十二代將軍家慶の時のものである。もちろん、読むのは初めてである。想像していたよりはずつと簡潔であり、ある意味でもつともなことが続く。これで、日本全国の大名を統治したのであるうか。すばらしく、省エネの憲法である。

四年前、会社を退職し、カレッジ入学とともに歴博友の

会に入会した。この武家諸法

度は、友の会主催の古文書講

座の最初のテキストである。

五十名くらいの会員とともに歴博の先生の講義に酔った。

・ 古文書辞書を引き

・ よく出てくる特有の文字を

覚え

・ 慣れるためにテキストを音

読

することを教わる。それでも

一人では半分の文字も解読で

きない。先生の解説にもつい

て行くのが精いっぱいだ。何

度か講義に出て行くうちに少

ずつ読める文字が増える

とともに、楽しくなる。頭の体

操でもある。ことしも年間二

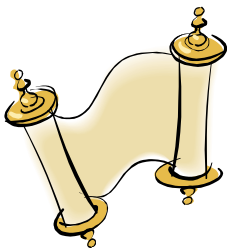
十回の古文書講座受講中だ。

いつの日か、TVで見える新撰

組の局中法度を読めるように

なりたいものだと思っている。

(大崎台 木村幹男)



2月の黒板

佐倉学講座 「印旛沼の自然」のご案内

下記のとおり、中央公民館では印旛沼に関する講座を開催いたします。ぜひ、この機会に印旛沼について学習してみませんか。

記

日 時	第1回 平成22年2月 6日(土) 13:30~15:30 第2回 平成22年2月27日(土) 13:30~15:30
対 象	市内在住の一般成人 50名(先着順)
参加費	無料
講 師	第1回 NPO法人水環境研究所 白鳥孝治先生 第2回 NPO法人水環境研究所 岩井久美子先生 田村嘉之先生
学習内容	第1回 印旛沼と共に生きる人々 第2回 印旛沼流域における地形・地質の成り立ち
会 場	佐倉市立中央公民館 学習室3

申し込み 佐倉市教育委員会 社会教育課へ電話でお願いします。
電話番号 485-6189

さくら道

“ガリツガリツ”と懸命に、そして力強くガリ版を切っている音が何となく聞こえてきそうな、そんな感じの字体である。また紙面に満遍なくインクの斑点があるので、間違いないガリ版刷りであり、独特の魅力と迫力がある。これは先日、図書館で、この機関誌『ななかま』の創刊号を閲覧した時の率直な感想である。創刊号は昭和五十一年十一月に、高齢者の学習を援助し、

交流の場を紙面に展開する趣旨から『長寿大学ニュース』として、B5判の4頁で発行されている。多分、経験のある方ならお分かりかと思うが、鉄筆でガリ版を切るのは大変根気のいる作業である。それだけに、担当された方のご苦労は大変だったのではないだろうか。時が移るうとも、『ななかま』が読者と一緒になって、ななまの輪を広げながら、いつまでも歩み続けることを願ってやまない。(鵜木聖次)

あとがき

二月は一年で一番寒い時期とされていますが、暦のうえでは四日に立春を迎えると春寒さのなかにも、日一日と日の光が強まりを増し明るくなってくるような気がします。さて本号は創刊以来四〇〇号になりますが、教育長よりご寄稿いただき厚く御礼申し上げます。

最近、『ななかま』は市内各所に置いておく部数が短期間内になくなっていきます。多くの方々が手に取ってお読みになっているものと思いますが、読者層の拡大は編集に携わる者にとつて嬉しい限りです。過去、一〇〇号、二〇〇号、三〇〇号の発行は、二月、六月、十月で四〇〇号でまた二月になりました。次の五〇〇号は八年先の六月発行です。編集委員も世代交代して編集作業を続けていきます。今後ともよろしくお願い致します。

(金井義彰)